

月の光が、鉄のらんかんに冷たく鋭く光っている。川の水の上では、それはなめらかに揺れながら、ときどきキラキラッと光って流れていた。

「ここに少し座っていよう」

明子は心の内に慄えるものを鎮めたくて、行一と並んで砂利の上に腰をおろした。

「お月さまは、明るいね」

明子の指さす空を仰ぐ行一の目にも月が光っている。

ああ、小さな男の子よ！わたしの傍に喜んで座っている小さな男の子よ。

明子は、いとしい思いで、足のそばの小石を拾い両手を合わせて振りながら、それをさっと両方へ分けて、にぎりこぶしのまま行一の前に差し出した。

「どっちに石が入ってる？」

ええ、と行一は吃驚した笑いで明子を見上げ、意味が分ると、真剣ないたずらさで、ようし、と両手の母のこぶしを見比べ始めた。

「こっち」

と彼の指が強く明子の片方の拳を押す。

「ああ、負けた。こん度は行一よ」

「ようし」

幼なく、母のやったとおりを真似て、こみ上げてくる笑いを月に照らさせながら、母の前につき出す。

「こっちかな」

「ちがいますよ。こっちですよ」

得意げに、握っていた方の掌をひろげて見せ、また勢いづいて耳の上まで拳を持ち上げて握っている。

明子の星の下で砂利の冷たさが浴衣をとおし、肩は白々と月の明り、寒かった。

耳を澄すと、ちろちろと川は絶えず音を立てている。この川は、ちろちろ、ちろちろ、ちろちろとどこまでも音を立てながら流れてゆくのである。突き当たり、曲り、ゆるく廻って、やがて川は東京市内へ入ってゆく。小さな家のたて込んだ汚い裏を通り、市電の響きに水音を消され、劇しい生活の灯を映しながら市中を通り抜けてゆく。やがては両国あたりで、大川に流れ込んで海へそそぐ。そして川はあとからあとから、いつまでも流れをつづけてゆくのであろう。

時折、警笛を聞こえてくる郊外電車は、川のずっと北方を走っていて、これは東京から外へ、川越の方まで行っている。

行一を相手に小石遊びをする明子の、思いをひそめた姿は淋しいものであった。細いうなじから背へ、柔らかく丸味をもった行一の姿は、高い月空の下で、小さく、小猿ほどに見えた。